

ウェーバーのクラリネット室内楽

本プログラムには、ウェーバーと当時の名クラリネット奏者ハインリヒ・ベールマンとの友情から生まれた「傑作室内楽」が並んでいる。

歌劇《魔弾の射手》序曲

ウェーバーの代表作と言え、歌劇《魔弾の射手》だが、その序曲の編曲版では、オーケストラが奏でるドラマを、クラリネットが主導的に表現する。冒頭の神秘的な森の情景から一転、ヒロインのアガートを活写する清らかなテーマを、クラリネットがたつぷりと歌い上げる。そして、最後の歓喜が爆発するコーダでは、クラリネットが高音域を駆使して、勝利のファンファーレを高らかに響かせる。

歌劇《ジルヴァーナ》の主題による変奏曲

オペラ・アリアをもとにしたこの曲では、クラリネットがプリマドンナの役割を担う。主題提示部では、ブレスの技術を駆使した、滑らかで艶のあるレガート奏法が堪能できる。変奏が進むにつれ、細かい音符が歌手のコラトゥーラのように絡みつく。特に、低音域から高音域までを一気に駆け上がるスケールは、クラリネットの音域を示す聴きどころ。

協奏的大二重奏曲

「協奏的（コンチェルタンテ）」とある通り、ピアノ伴奏による「クラリネット協奏曲」に近い。ピアノの重厚な和音に負けないよう、クラリネットには格段の力強さが求められる。全3楽章構成で、「第1楽章：Allegro con fuoco」は、ソナタ形式で書かれた、情熱的な勢いのある楽章。ピアノ伴奏に乗って登場する冒頭では、オペラのような歌心あふれる旋律と超絶技巧が交互に現れる。「第2楽章：Andante con moto」は、憂いを含んだ抒情的な楽章。クラリネットの豊かな音色・色彩・ダイナミクスを活かした対話が繰り広げられる。終楽章の「第3楽章：Rondo: Allegro」は、輝かしいフィナーレに向けて、両楽器が複雑なリズムや急速なパッセージを交わしながら軽快かつエネルギッシュに突き進む。

舞踏への勧誘

「舞踏への勧誘」は、1819年に書かれたピアノ独奏のためのロンド。それまで踊るための伴奏音楽だったワルツを、鑑賞用の芸術作品へと高めた画期的な作品とされる。曲全体にストーリー性があり、まず「序奏」では、騎士が貴婦人をダンスに誘い、一度断られるものの、再度誘って承諾を得るまでの対話が描かれる。続く「主部」では、華やかで躍動感あふれるワルツが繰り広げられる。そして「後奏」において、踊り終えたあと、騎士が感謝を述べて席へ戻る、静かな場面で幕を閉じる。

クラリネット五重奏曲

モーツァルト、ブラームスと並び称される、クラリネット五重奏曲の傑作。「クラリネット×弦楽四重奏」という「協奏的」スタイルで書かれている。全4楽章構成で、「第1楽章：Allegro」は、ドラマチックなソナタ形式で始まる。独奏楽器の華やかな技巧が際立ち、オペラのような劇的な性格を持っている。「幻想曲」と題された「第2楽章」は、オペラのアリアを思わせる叙情的で深い感情表現が特徴。3オクターブにおよぶ広い音域や跳躍、繊細な半音階のスケールなど、高度なコントロールが要求される。「第3楽章」は「メヌエット」という名称だが、楽譜には「カプリッチョ（狂想曲）」の指定があり、スケルツォのような軽快で遊び心のある性格を持っている。「第4楽章」は「陽気な」と記されたロンド形式のフィナーレ。疾走感あふれる活発な主題と、クラリネットの超絶技巧を駆使した、火花を散らすような華やかな終結部が聴きどころ。

クラリネット・コンチェルティーノ

ウェーバーが1811年にわずか数日で書き上げたクラリネットのための作品で、当時の名手ハインリヒ・ベールマンのために作曲された。クラリネットの歌心と華やかな超絶技巧が凝縮された名曲として古今東西で愛奏・愛聴されている。全体は切れ目なく続く3つの部分（第1部：Adagio ma non troppo／第2部：Andante／第3部：Allegro）から構成されている。今回は、オーケストラによる伴奏パートをピアノ一台用に編曲したピアノ・リダクション版でお届けする。